

鋳物

鋳金（ちゅうきん）とは、日本の金工で使われるいくつかの伝統的な鋳造方法を指す。鋳造とは、溶かした金属を型に流し込み、冷やすことで金属を形作る技法である。金属を液体として扱うため、鋳起しなどの他の金属加工技術よりもはるかに複雑な形状を実現することができる。1964年に重要無形文化財に指定された。

鋳造技術は、弥生時代初期（紀元前 400 年-紀元 200 年）にアジア大陸から日本にもたらされた。1 世紀頃までには、刀や鏡、銅鐸などの青銅器が高度な技術で造られるようになった。また、鉋石を精錬し、金、銀、銅、錫、鉄などさまざまな合金を作る冶金技術も発達していた。そして、これらの材料を錬り、鋳造する専門技術が、金属加工業で代々受け継がれていったのである。何世紀にもわたって、鋳物は装飾品だけでなく、梵鐘や茶釜、飯釜など日本の伝統文化に関連するものにも用いられてきた。特に石川県では、茶道の銅鑪（どら）作りに鋳物が受け継がれている。

鋳金は、鋳型の作り方で分類される。蠟型（ろうがた）はロストワックスの技法で作られる。込型（こめがた）は、粘土の模型と石膏で内型と外型を作る込型鋳造（piece molding）の技法である。惣型（そうがた）は、外型の半分をなす 2 つの椀状の鉢の壁に沿って、砂と粘土（真土）と呼ばれる混合物を層状に押し付ける技法である。焼成後、外型と内型を卵のようにはめ込み、その間に液状の金属を流し込む。